
きっかけ水筒

こさけ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

きっかけ水筒

【Nコード】

N6523J

【作者名】

こさけ

【あらすじ】

親友の依頼で、帝國軍人が封印されている水筒を手に入れてしまった帝。

軍人は自分を封印した男を見つけ、問答の末に和解。その結果、二人はなんと帝に恋のきっかけを与えることに。

その理由は、軍人は水筒から解放された恩義に報いるため。男は、帝と由妃が昔の自分と妻にひどく似ているということ。

彼らは帝の仲人役を果たしながらも、昔を思い出し笑い合うのだった。

(前書き)

恋愛ジャンルに登録しましたが、はっきり言って曖昧です。初めての短編作品、お楽しみいただければと思います。詳しくはいつも通り後書きにて。

ある日の昼休み、親友が俺に頼み事をした。

「なあ、また買っておいてほしいものがあるんだ」

「いつものことだし構わないけど。今度は何だ？」

頼みごとというのは、購入目当ての探し物のこと。インターネットオークションを使えば大抵は見つかるため、発見から受け取りまでの仲介を俺に頼んでいるのだ。

自分で探せば早いとは思ったが、どうやら彼はパソコンが苦手らしい。それを言ったら俺だってインターネットがせいぜいなのだが、頼られる以上はと引き受けているわけだ。

「今度は古い水筒を探してほしいんだ。時期的には第二次世界大戦ぐらいのさ」

「……というと、軍人が使ってたようなやつか？」

親友は、いつも変なもの……と言っては失礼だが、おおよそ使いそうもないものばかりを注文する。なぜなら俺の親友、草上^{くさがみわたる}渉は演劇部員なのだ。

昔から顔が良く、もちろん人当たりも良く、主役級の似合いそうな男だった。

それが遂に、三年生ゆえに主役を張ることになったらしい。渉のことだから、高校に進学しても演劇部に入部するのだろう。

そんな彼は手持ちの紙に簡単なイラストを描き、指差した。

「新品でも中古でもレプリカでも、こんな感じならいい。小道具で持つだけで、水を入れたりはしないからさ。予算は高くても三千円。ホレ、頼むぞ」

「おう」

千円札を三枚受け取り、財布に仕舞い込む。それからいつものような雑談に入った。

自宅に帰った俺は、机の上のパソコンを起動した。目的の水筒を探すためだ。

「これは……ダメだ。現代風だな。こっちは……あー、惜しい！」
部屋には誰もいないというのに、ついつい呟いてしまう。そのまま検索を続けていると、俺はあまりに的確な品を発見した。

「陸軍水筒。実際に使用していたものです……って、うそお!？」
その説明を見て俺は驚いた。なぜって、軍人が実際に、しかも戦場で使用していた水筒だと書かれていたのだから。

「こ、これ……祟りとかないよな……?」
俺は恐怖を感じた。だけど、同時に押し寄せる好奇心もあった。そんな混乱にかき消され、使用するのが自分ではないということも忘れてしまっていた。

恐怖と好奇心の狭間で揺れ動いた結果、俺は落札のボタンを押した。

「ありがとうございました！ 失礼します」

数日後。郵便局の職員に手渡され、それは遂に手元に届いてしまった。

「どうしようどうしようどうしようどうしよう」
つくづく言葉と行動が伴わない。頭では困惑しながらも箱を自分の部屋に持ち込み、あまつさえ開いてしまったのだ。

「これが……本当に戦場で使われていた水筒……」
興味というものは次々に浮かび上がる。そして、一度出てくれば抑えられなくなる。

そうでない人も多数いるのだろう。だけど俺は、興味を抑えられない人間だった。

キュポッ

「中には……あッ!!!」
しまった。そう思った。

うっかり手を滑らせ、水筒を落としてしまったのだ。しかも、水を入れる穴を上にして。

「うわわわわ！ タオルタオル！！」

泣きつ面に蜂だった。俺が落とした水筒には、なぜか水が入っていたのだから。

「まったく、なんで水が」

倒れた水筒をすぐに起こし、フローリングの床に広がった水溜りを拭き取る。

「しかもこれ、いつの水だよ」

自問自答するように可能性を考え、その答えにぞつとした。

「もしかして、戦争に持っていてた水とか言っくんじゃあ……」

「その通りだ」

突然聞こえた、聞き覚えのない声。俺はぎよつとした。何故ならそこには、軍服を着た体格のいい男がいたのだから。

ヘアースタイルは角刈り。目はギラツとしていて、いかにも戦場の男という感じた。

「あ、あなたは……ッ!？」

普通の男が立っていただけならそんな行動は取らなかったと思う。泥棒と判断して臨戦態勢を取るぐらいはしたかもしれない。

だけどこの状況では、それも無理な話だった。大戦当時のものだという水筒。それを使用するに相応しい格好の軍人。全てがぴたりと当てはまるのだから。

思わず後ずさり、震えながら指を差す。そんな俺の行動を見て、男は目の前までズンズンと足を進めてきた。

「何だか知らんが震えるな！ 貴様それでも帝國軍人かッ!？」

額がぶつかりそうな程の至近距離まで詰め寄る、軍人の男。俺はとくと、ただ恐くて震えていた。

「目を覚ませ!! この馬鹿者がッ!!」

飛んできたのは、文字通り目を覚ましそうな強烈パンチ。けれど、その拳は大きく弧を描いてすり抜けた。

「何……だと……？」

それに驚いていたのは、俺よりむしろ軍服の男だった。自分の拳を眺めて呆然としていたのだが、突然こちらに向き直り尋ねた。

「貴様！ このワケのわからん場所については後で聞く。まず名前と所属を言ってみろ！！」

「名前は……ひらうちみかど平内帝」

所属と言われてもどう答えればいいかわからない。そんなことを考えていると、男はなんと握り拳を俺の前に突きつけ、怒鳴ったのだ。

「帝……帝だと！？ 貴様のような、僅かな覇気も感じられぬ弱い男がそのような名を持つなど、天皇陛下に対する侮辱そのもの！ 許さん！！」

その言葉に、俺はぐっと拳を握った。皮肉にも、目の前の男に立ち向かう勇気をくれた。

そしてそれは、弱弱しいと言われたからではない。

「体育系じゃないし覇気はそりゃあ無いけど……この名前は、俺だつて嫌なんだッ！！！」

「……何？」

「この名前は俺のじいちゃんが家族の反対を押し切って命名したんだ！ 俺だつて嫌で、改名したいぐらいなんだよ！！」

そう。両親から聞いたことのある話。重い空気ではなかったが、俺にひたすら謝っていた。それだけに現在の名前を気にしながらも堪え抜いているのだ。

悔しそうに歯を噛み締めると、目の前の男は俺に尋ねた。

「……不本意だが、それなら仕方あるまい。では貴様の祖父は、もしや帝國軍人か」

「そうだよ。昔戦つてたつて何度も聞いた」

腕を組み、不思議そうに首をかしげる軍服男。俺からすれば目の前の存在のほうが不思議なのだが、ひとまずそれは突き詰めない。

「だが、平内という兵など聞いた事はないぞ」

「当然だよ。ただの雑兵の端くれだったそうだから。運良く生き残

「つたらしい」

「そうか。とはいえ天皇陛下の御為に共に戦った男には違いあるまい。同志として、愛敬の念は抱くぞ」

感慨深そうに頷く軍服男。会話の間が空く。怒りが抜け、そういえば大事なことを聞いていないと思いついた。

「そ、そうだ！ こつちも答えたんだから、貴方のことも教えてくださいよ！」

普段から極端に弱そうには見えぬ標準的な俺だが、そのびびりが見て取れたらしい。急に敬語に戻ってしまったことも手伝っているのだろうか。軍服男はニヤリと笑って答えた。

「貴様のようなへつぱり腰に教えてやるつもりはなかったが……特別だ。俺は帝國陸軍第五小隊所属、周藤賢吾少佐だ！！！」

再び間が空く。続きを求めるように、俺は少佐に尋ねた。

「それだけ……ですか？」

「それだけとはなんだ。軍人は名前と所属だけ言えば十分だろう」

「いや、そうかもしれないけど！ 俺としてはなんで少佐が現れたのかとか、そういうことも知りたくて！」

「そんなことは俺が知るか」

一言で片付けられ、がくつと肩を落とす。が、その言葉には続きがあった。

「……と言いたいところだが、よく知っている。忌々しいほどに、鮮明にな」

言うことがわからず、一層険しくなった表情の理由もわからなかった。

周藤賢吾少佐は、それを語った。

「誠に信じがたいことだが、この身で味わった以上は信じるしかあるまい。何やら平和な場所に辿り着いたようだが、私の戦っていた大戦中には魔法というものが存在している」

「なん……だつて……!？」

「魔法といつても炎や氷を飛ばしたりするわけではない。いわば呪

術が発展したようなもので、使える者も使う者もごく少数。そのため公にはされておらず、広まっておらんのだ」

「そ、そんなんですか」

少佐の言う魔法とは、最近のテレビゲームで見るとは全く違うらしい。呪術の発展というからには物理作用はなく、何らかの精神作用に影響するような技。どちらかというと『黒魔術』寄りな技だったのだろう。俺はそう判断し、話の続きを聞いた。

「その水を媒体に、精神体のみを水筒に封印された。無論身体も既に朽ち果てているだろうから、戻るべくもないが。霊体と成り果てた俺は、無意識の浮遊状態で水筒の中を漂い続けた。そしてようやく解放され、出てきた場所がここだということだ」

「水を媒体に……床に染み込んだから、少佐はそこから出現したってことか……」

少佐は辺りを見回していた。即ち、俺の部屋を。

それはまずい。いくら触ることが出来ないとはいえ、部屋をじろじろ見られたくはない。

そう考えて、俺は少佐が最も気にしているだろうことを、聞かれないうちに教えた。

「現在は西暦二千二年。随分変わっているでしょうが、ここは多分少佐がいたところですよ」

「……………!?!?」

少佐の口から言葉は出ない。ただただ、睨むというよりも困惑の目で俺を見るのみ。

そしてもう一度首を左右に回し、俺にぎらりと目を向けた。

「貴様。本気で言っているのか」

「本気です。本当に二千二年なんだから仕方ないですよ」

「ということは、もしかや帝國軍は……」

「あの、申し上げにくいんですが……………随分昔に敗戦したんです。それから再建して、今のこの国があるんです」

「なんとツツツツツ!?!?」

膝を突くように崩れ落ちる周藤少佐。大きな声で泣き出していた。それはまるで、玉音放送を拝聴した直後の帝國臣民のようで。その姿に、俺の中で彼に対する恐れや怯えがすうつと消えていく。霊体であるため動作だけに留まるものの、周藤賢吾少佐の男泣きは凄まじかった。

ようやく落ち着いた少佐は、俺の前にどっかりと座っている。そして、信じるしかないと思っただろう。俺の説明を真面目に聞き始めたのだ。

「お前に頼る以上、お前は我が戦友だ。敬語は不要である」

こんな一言を貰ったので、俺はタメ口で。最初は抵抗があつて敬語を使つたけれど、なんと逆に怒られた。というわけで、タメ口で喋っているのだ。

「そういうわけだから、ここは少佐にとって未来の世界なんだ。終戦したのは千九百四十五年。五十七年が経つたつてことになるよ」

「当時の俺は二十五歳だった。生きていれば八十二歳か……」

「そうなるね。今でも戦時中に生きていた人はいるよ」

「何ッ!? どこだ、話を聞きたい!」

しまった、と思つた。まさか場所を聞かれるとまでは思つていなかったのだ。

だがこうなつては言わないわけにはいかない。そんな人がいそうな場所を考え、告げた。

「病院かな」

「成程、こちらの道か」

俺は今、帝に教えられた通りの道を進んでいる。それにしても

……

「神の国も、随分と落ちぶれたものよ」

あまり驚かぬようにと、帝から予め説明は受けていた。そのおかげ

でいちいち驚くようなことはないが、それでも順応は出来ない。低俗すぎるのだ。帝國軍人である俺にとって。

「あれがこの時代の女学生か。鬼畜米英の様式であるのは仕方がないとしても、あの露出は何だ。男子学生も、それを指摘することなくヘラヘラと笑いおつて。恥を知れ」

昨日学んだことだが、俺の姿は大抵の者には見えならしい。今現在は水筒の水を落とした帝にしか見えていないが、他の条件も無いとはいえない。気をつけるとしよう。

「ここか。それにしても、やはり予習というものは大事だな。こんな奇天烈な病院は、初めて見たのでは病院と思えず通り過ぎてしまっ

俺が目にしたのは、桃色の外装をした総合病院。いくら戦時中ではないとはいえ、このような病院は無かるうというものだ。

「どうにも摩訶不思議だが、入らねば話は始まらぬな。帝の話した通り、入院患者のいる階層へ上ってみるとしよう」

俺は階段を探し、見つけるとそのまま上った。途中で老人を見つけたが、どれも知った顔ではない。加えて何も反応しないところを見ると、どうやら俺が見えていないらしい。

「む。最上階か。ではここから見てみることにしよう」

俺は病室を覗いた。最初の病室には、俺が見えるという者は一人もいない。

次の病室も、さらに次の病室も同様だ。

「ならば下の階だな」

階段を下り、一つ下の階層へと向かう。ここで俺は、遂に奴を発見してしまった。

ベッドの背もたれに背をかけ、上半身を布団から出して座っている老人。奴こそが、俺の標的にすべき男。

顔に皺が増えようと、俺にはわかる。奴は、奴こそは、あの

「貴様アアアアアアアア!!!」

「す……周藤!!!?」

「え？」

俺は、振り上げた拳をぴたりと止めた。当たる当たらないの問題ではなく、思わず動揺して。なぜなら、そこに一人の娘がいたのだ。

「おじいちゃん、どうしたの？」

「あ、ああ。ちょっと思い出しただけだよ。顔はわかっているのに名前が出てこない……ってことがあるだろう？ やっと思い出してね」

「それにしたつて、いきなり叫ばないですよ。びっくりしちゃうじゃない」

「はは、すまんすまん」

俺は、この二人の会話を呆然と眺めていた。そして、老人も俺を見つめていた。

『待ってくれ』

片手でそんなサインを出しながら。不本意だが、俺はそこで待つことにした。

「それでね、おじいちゃん。今日はね」

娘が楽しそうに笑う。見た感じ気の強そうな、そして聡明そうな娘だ。漆黒の長髪が美しく、俺の趣味ではないが、顔も十分に整っていると思う。

道中見かけた制服を着ているところを見ると、この時代の学校からの帰りなのだろう。

「貴様の孫か」

奴以外に俺の声は聞こえない。それを確認した上で尋ねた。

すると奴は、孫との会話に紛れてこくりと頷いたのだ。

「ふん……いくらでも待つさ。貴様の孫に罪はない」

言葉通り、俺は待った。奴とその孫の会話を眺めながら。

「それじゃあおじいちゃん、今日は帰るね。また来るからね」

「ああ。遠かつたろう。次は休日にもいらっしやい」

奴の孫が、手を振って病室を出て行く。見えなくなるのを確認して、俺は奴の前に立った。

「久しぶりだな。皆元俊雄よ」

みなもととしお

俺は皆元をぎろりと睨みつけた。すると奴め、突然寝台を降りて土下座をしてみせたのだ。

「すまない！！ 我が親友、周藤よ！　ずっと……ずっと謝りたかった！！」

皆元と出会ったのは完全な偶然であったが、出会った以上は元より問い詰める予定だった。

「ひとまず頭を上げる。そして、言い訳があるなら言ってみろ」

俺は、こいつの話を聞いてやることにした。

「なぜ、入院などしている」

自らの言葉通り、俺は驚いていた。話を聞けば、皆元は謝ってばかり。俺に、そして散っていった戦友達に。

「だが、反省しても仲間達は帰って来ぬ。貴様の情報操作で死んだ戦友は、永遠に帰らぬ」

「そつだ……あれは全て私が……　すまん、本当に馬鹿なことをした……すまぬ……」

寝台に寝直した皆元は、傍に立つ俺の前でポロポロと涙をこぼして泣いている。だが、お涙頂戴で許せはしない。追い詰める。そのためには、まず真実を問いたださねばならない。

「歳を取って涙脆くなったか。それとも演技の練習でもしたのか」
「違う！！　これは……これは本当の、心からの涙だよ……」

皆元が、寝間着の袖の端で涙を拭く。俺が黙っていると、奴は自白するように語り始めた。

「人質がいたんだ。私は敵国の連中に拉致され、妻を人質に取られていたんだ」

「何？」

「奴らは私が逆らわなければ妻は無事に返すと約束した。実際、私が全てを果たしてから返された妻は怪我一つなかった。奴らは約束を守り通した。だが、その結果……」

「俺は、周藤賢吾は失踪。所属する部隊は全滅した、ということか」
「ああ。そして俺は奴らに撃たれ、命からがら逃げ出したが、その時の傷が元で入院を繰り返しているんだ。だが妻は確かに無傷だったから、約束は破っちゃいない。撃たれたのは私だけだ」
俺は怒りを堪え、奴の話の続きを聞く。

「私の裏切りが響いてか、帝國軍は連敗に告ぐ連敗。いくら戦略が良かろうと、帝國軍の筆頭中の筆頭、軍神部隊と呼ばれた第五小隊を欠いては勝てるはずもない。帝國は……終わった」

「あの時の突然の裏切りは……つまりそういうことか」
皆元が暗い顔で頷く。俺は堪えきれず、怒りを露わにした。

「貴様が、貴様が俺をあの水筒に封印した！ 鬼畜米英の兵隊ですらなく、よりよって、俺の親友だったお前自身が！！」

「ああ。親友……だったなあ。撃墜数を、競ったり……上官殿と一緒に怒られたり……したなあ。原因はいつもお前で……」
皆元の、呻くような泣き声。

抑えきれぬ。俺の中で何かがそう呟き、感情が爆発した。

「誰より頭の良かったお前は陸軍情報参謀になった！ 誰より強かった俺は陸軍少佐になった！ 共に違う方向からの勝利を誓い合った！ それすら嘘だったと言っのか！？」

「嘘じゃないさ……嘘じゃないさ……だが、だが妻が……」
もしできるのなら一発殴りたかった。一発殴って、それで終わらせたかった。

だが俺にもわかる。怒り続けているだけでは、解決しない。

「……貴様の妻は、仲間内でもえらく評判の女だったな。結婚の報が流れた時、お前は誰よりも羨ましがられていた」

「可愛らしく頭脳明晰で、気遣いも出来る。お前にはお似合いだ。しよっちゆうそう言われたものだ」

三秒ほど沈黙が続いただろうか。気付けば、俺は皆元に怒鳴っていた。

「その自慢の妻のために、俺達を売ったのか！？ 俺達を掃討させ

よると、人質にされた妻を守るためだったそうだ」

返す言葉が見つからない。俺が黙り込んでいると、少佐は意見など求めていないかのように言葉を付け足した。

「妻と戦友、どちらを取ったかなどという小さな問題ではない。俺はただ、ずっと信頼していた親友に裏切られたことが悔しいのだ」
少佐がぐつと拳を握っている。その心中など、俺のような者に量れるはずも無かった。

「明日、学校なんだ。少佐も一緒に来てみなよ」

「俺が……？ この時代の学校にか？」

代わりに思いついたのは気分転換。それぐらいしか思い浮かばなかった俺だが、無いよりはマシだと思った。

「まあ、悪くはなからう。行ってやる」

意外なことに少佐も乗ったものの、今度は違う不安が俺を襲うのだった。

違う不安、それは 翌朝のこと。

「少佐、この水筒って人に渡しても大丈夫？ 貸すだけじゃなくて所有権自体移るけど」

「構わんぞ。媒体は既にお前の部屋の床に移った。加えて媒体は一つしか作れぬ。たとえ中の水を全て出されようとも、これ以上移ることはないからな」

それは同時に、少佐が俺の家になんと住み着くということではないか。そう思ったが、言うのはやめた。それより何より、注意しておくことがある。

「見物は好きにしてもいいけど、外では、もちろん学校の中でも話しかけないでね」

「ふむ、それは何故だ」

「皆には見えない少佐に話しかけてたら、頭おかしい人だと思われるよ」

「……それもそうだな。あいわかった。協力しようではないか」
「ありがとう。質問とかあったら、家で答えるから」

少佐の協力的な姿勢に感謝しながら、俺らは駐輪場に向かった。自転車通学なのだ。

いるはずのない霊体約一名はどうやってついでくるのだろうか。それについては考えないことにしたが、正解だった。どうやら俺に憑依したままついてきたらしい。霊体とは、便利なのか不便なのかわからない。

昼休み、俺は水筒とそのお釣りを渡すために渉に会った。場所は、俺の所属する教室。

「お！ まさにコレ、って感じの奴じゃん！！ お前良い眼してるぜ。ありがとな」

「っていうか、それしか無かったんだけどな。まあ役立ててくれよ」
水筒だけで渡したのでは外野から騒がれる可能性があるため、手提げ袋に入れて渡した。

いや、渡そうとした瞬間に俺は固まってしまった。視線を渉から背けて。

「おい、どうした？ …………… はーん」

俺は教室に入ってきた一人の少女に目を向けていた。言い換えれば、気を取られていた。

そこで妙な気配を感じて渉に視線を戻すと、渉はニヤニヤと笑っていた。

「よし、ちよつと廊下いこうか。人のいない辺りがいいな」

「ちよ、渉、何を！？ …………… ったく」

楽しそうに笑っている渉。何を言われるのか、もう見当がつく。

「お前、皆元のことが好きなんだな」

やはりというか、なんというか。

「そんなわけがあるか。教室に人が入ってきたら、誰だつて目を向けてしまうだろう」

「誰だつてつてことはないけどな。それにしたつて見つめてる時間

も長かったしよ」

「ぐ……」

我ながら、嘘をつくのが下手だと思つ。言葉は続かず、これ以上は騙せない。

「……そうだよ。もうわかつてるなら、聞くまでもないだろ」

「まあ待てよ。相談ぐらい聞け」

こうして、相談というよりも渉の一方的な質問が始まった。

「一体いつ好きになつたんだ？」

「一年の時、同じクラスになつてからだ」

「それで、どこが好きなんだ」

「可愛いのは勿論だけど、それが理由じゃない。彼女は頭も良い。

入学してすぐの学力テストで皆元が学年トップを取つた時は、なんというか度肝を抜かれたな」

「頭が良いから好き、つてことか？」

「頭が良いからというより、カリスマ性っていうか………それからも優秀なところを何度となく見せ付けられるし、強烈なインパクトが忘れられない………つてところか。好きとはなんか違う気がする」
我ながら何故なのだろう。そんなことを考えていると、渉はクククと笑っていた。

「バーカ」

「なっ!?!」

「そりやとつくに好きなんだよ。可愛いだの頭が良いだのは何も関係ねえ。お前の好みにぴつたり合致したつてだけだろ」

「そんなわけがあるか！俺は今まで、いわゆる『タイプ』なんて考えたことは……」

「で、勝算はあるのか？」

こちらの話に割り込むように尋ねられ、仕方なく答える。

「……あるわけないだろ。相手は全てにおいて俺の数十段上。近付
けもしない、高嶺の花つて奴だ」

「果たしてそうかな？」

「何？」

渉は、またしても笑っていた。わかってねえな、とでも言いたげに。「近付けないんじゃないかと、近付かないだけだろ。お前は相手が自分より上だから、無理だと決めきって敬遠してる。人はきっかけ一つで誰とでも仲良くなれるのに、そのきっかけをお前自身作るうとしていない。それじゃ知り合いにすらなれないぜ」

渉の言葉に、ぐっと拳を握る。悔しさは出てこない。何故なら、俺自身その言葉を痛感しているからだ。渉の言っていることがよくわかるからだ。

「きっかけを作りたいつてんだつたら、その時は言えよ。皆元とは俺も友達だから、協力するぜ」

手をひらひらと振り、渉が立ち去っていく。残された俺は、一人下を向いていた。

結局立ち直ることは出来なかった。失意のまま家に帰ると、待っていたのは少佐の質問責め。

「貴様、あの皆元という娘を知っているのか」

それも、ピンポイントだった。

「そうだね、知ってる程度だ。クラスメイト……いや、級友だから」少佐の時代から考えると、英語は一切使われていなかったはず。そこを考えて言い直すも、少佐は何か別のことを考えているようだった。

「少佐？」

「貴様、あの皆元という娘に恋しているらしいな」

「なんだ、やっぱり聞いてたんだな」

今更焦って否定する気にもなれなかった。俺は、大して反論もせずにあっさりと認めた。

「きっかけが必要だと、お前の友は言っていたな」

「……そうだよ」

沈黙。十秒ほどの後、少佐は遠い目で語り始めた。

「俺の戦友に、叶わぬ恋に挑んだ男がいた」

「え……？」

「当初のその男は、誰からも笑われていた。お前ごときが手に出来る女ではない、とな。なぜならそれは武道に長けておらず、かといえは頭脳もまるでない。当時としては致命的な、欠点揃いの男だ。そんなくだらん男が愛してしまったのは、可愛らしく頭脳明晰で、気遣いも出来る。そうまで評価されるほどの、言わば高嶺の花」

「普通に考えたら、叶うはずないよな…… 住む世界が違っつて感じだし……」

語りきるつもりなのだろう。俺の相槌を気にせず、少佐は話を続けた。

「男はその娘に話しかけたが、見かけによらず気が強い娘だったらしい。何度も突っぱねられ、それでも諦めず会話を試みた。無論ただ女を追ったわけではない。奴自身、その女に見合う男になるうと猛勉強を始めた。自分に武道の才覚はないからと、学習一本に絞ることを決めたらしい。男はめきめきと頭角を現し、陸軍随一の智謀を発揮し始めた。女もそんな奴を見直したのか、少しずつ奴と会話をするようになっていた。そして男は、初めて情報参謀に任じられた作戦行動の際、その女に意見を求めた。二人は共に思案を続け、一つの軍略を完成させた。結果は大勝利。張り巡らせた罠に全ての敵をかけ、全滅させた」

「す、凄い……」

「その大勝利を経て、女は奴を認めた。片方は気が強くて意地っ張りな女、片方は自分の能力がまだ至らないのではないかと引っ込み思案な男。この二人を恋仲にさせるのには、俺も随分と骨を折ったものだがな」

「俺もつて……少佐!!？」

少佐はフツと笑った。きつと俺の言いたいことがわかっているのだろう。

だから俺もあえて追及はせず、黙って話の続きを聞いた。

「そうして奴らは結婚した。戦の軍略は必ず二人で考え、帝國軍を連戦連勝に導いた。軍もその力を疎かには出来ず、男尊女卑の時代の中、二人を平等に重用していた」

ここまで来れば、帝國の勝利は間違いない。誰だってそう考える。俺だってそう考える。

だが、事實は小説より奇なり。

「しかしあと一步で勝利という時、奴の妻が敵国特殊部隊に拉致されたのだ。男は茫然自失し、そんな折に奴は敵国からの交渉を受けた。周藤賢吾少佐を封印し、第五小隊を壊滅せよ。さすれば妻は無傷で返してやる、とな」

「周藤……賢吾……少佐!？」

「そう、俺だ。俺はそんな間抜けな水筒に封印され、仲間達は奴の罠にかかり全滅した」

「……………」
言葉が出なかった。何を言っても足りない気がして、何も言えなかった。

「どうだ。奴はきっかけを作り、力を尽くして愛する女を手に入れたぞ」

「う」

少佐は過去を語りたかったのではない。恐らく俺に教訓を示したかったのだろう。

そして、それによって少佐自身、心境の変化が訪れたのかもしれない。

「……………」
奴も苦勞の末に高嶺の花を娶ったのだ。苦惱の末に妻の解放を選んだその気持ち、わからんでもない」

「え?」

「帝よ。俺は明日、少しばかり出かけてくるぞ。お前が戻る頃には俺も戻っている」

「あ、ああ。いってらっしゃい」

少佐には、何か思惑があるようだった。まるでわからないまま翌日になり、俺は一人で学校に向かった。

俺は、決めた。

「皆元よ。これで決着だ」

俺は今、昨日通った道を辿り、皆元が入院している病院へ向かっている。

ただ旧友に会うためではない。永きに渡り憎んだ旧友を、赦すために。

「ここだな。いざ、突撃」

自分の心に念じるように、俺は低く呟いた。病院に入り、階段を上っていく。

そして

「周藤よ。また来てくれたのか……………いや、そんな軽い空気でもなさそうだな」

帝を除き、ただ一人だけ俺を視認することの出来る男。皆元俊雄。奴は寝台に体を寝かせたまま、こちらに目を向けている。

俺もまた皆元を見据え、尋ねた。

「貴様の孫は何という」

「皆元由妃だ」

「その皆元由妃に、好意を抱いている者がいる」

「……………ほう」

こちらの腹を探っているような、そんな顔ではない。俺は話を続けた。

「名は、平内帝。俺をこの時代に戻した男だ。腑抜けた男だが、水筒から出ることが出来た恩義はある」

「帝、か。あの時のように、仲人にでもなろうというのか」

「安心しろ。俺が与えるのはきっかけだけだ。なにもお前の孫をく

れてやるうというわけではない。それ以降は一切関与しない」

沈黙。皆元は、フツと笑った。

「あの時も、私と妻の仲を取り持ってくれたな」

「ああ。だから、今度はお前も協力するんだ」

「何……!?!」

俺は、皆元の隣にある三段柵を指差した。

「それは携帯電話といって、軍用無線が一般的になったようなものらしいな。些細な連絡も自由自在だと、帝から聞いた」

「そうだよ。なにぶん入院中の身だから、何かあった時のために持たされているんだ」

「ならば明日、それを使って皆元由妃をここに呼べ。ただし、急病を装ってな」

俺の言葉を耳にして、皆元の顔色が変わった。当然だろう。嘘をつけというのだ。

「ま、待て！ 急病の名目で呼び出して平然としているなど、心配している側としてはどんなにショックの大きいことか。そんなことをしたら、由妃の信頼を失ってしまうかもしれない！ たとえ演技をするとしても、病院に迷惑をかけることになる。第一、なぜ急病なのだ。ただ呼び出すだけではいかなのか!?!」

「いかな」

「何!?!」

「皆元由妃の通りそうな道に、帝を自転車に載せて待機させる。そして皆元由妃が通りかかった時、偶然を装って自転車で目の前を通らせる。そこで帝は、皆元由妃が急いでいることに気付いた振りをして後ろに載せる。あとはここまで来れば、関わりのきっかけぐらいにはなる」

「だから急がせるというのか!?! もう一度言うが、そんなことをしたら由妃の信頼は……」

「なら俺ももう一度言うが、お前の情報操作で死んでいった仲間達はどうなる。ちっぽけな水筒に封印された俺はどうなる」

俺の言葉に衝撃を受けたらしく、皆元は急に黙り込んだ。だが、攻め手は緩めぬ。

「ずっと謝りたいと思っていたと言った、あの言葉は嘘か。償いはしないのか」

「したいさ！ したいが……だが……」

「俺はそれで水に流す。お前を赦してやる。もつとも、戦友たちはわからんがな」

「お前の計画に協力すれば、お前だけは、俺の行いを許してくれるということか」

「いつまでも憎み続けるのにも飽きたのでな。帝へ恩を返し、お前を赦す。その手っ取り早い条件を探してきただけだ。お前も、謝りたいというならそれぐらい賭けたらどうだ。自分だけ傷付かずにいるつもりか？」

「……………わかった。協力しよう」

「それでいい。では情報参謀よ。作戦を練り直し、必要な道具などを教える」

こうして俺は、皆元と共に作戦を練った。少しだけ、昔を思い出した気がした。

少佐は、ここで待っていると聞いた。ここで待っていれば、皆元が走ってくるぞ。

「母さんの自転車に乗り換えてまで…… 二人乗りなんて大嫌いなんだがなあ」

少佐の話した計画通りに皆元を乗せるなら、サドルの後ろにある平面部分に座らせることになる。普段はクロスバイクに一人で乗るだけだから、正直言って慣れていない。

「急ぎつつ、安全か。無茶言うね」

俺が一人でばやいていると、遂にその時はやってきた。

「おじいちゃん……！ おじいちゃん……っ！」

制服のままの皆元が、困惑を必死に抑えたような、辛そうな表情で走ってきたのだ。

胸が痛んだ。騙しているようで。いや、実際のところ騙していて。『きっかけを作れないなら、俺が一度だけ機会をやる。掴んでみせろ』

少佐の言葉が頭から離れない。もう計画は開始されたわけだし、やるしかない。

「急いでるみたいだが、どうした!？」

「おじいちゃんが……っ!」

彼女が強気な性格であることは知っていた。無論、誰にでも肩肘を張るような無意味で無謀な強気ではないが、そこには元気があった。それが今、全くない。

彼女を初めて見た人なら、その性格を勘違いしてしまいそうなほどに。

普段なら、どうしたと聞かれても答えなかったはず。俺が同じ質問をしても軽くあしらわれてお仕舞いだろう。それが、ただのクラスメイトの俺にさえ泣きそうな顔を見せている。

「おじいちゃんがどうしたんだ!？」

「電話をかけてきたと思ったら、苦しそうに呻いて、電話を切つて……」

聡明な皆元はどこにもいない。必死に涙を堪えている。きっかけとか何とかはどうでもよくて、ただ彼女を急いで送り届けたい。そんな気持ちに駆られた。

「後ろに乗ってくれ!」

「で、でも二人乗りは……」

「違法だつてことはわかってるし、普段は好まない! 誰でもやってるから良いとは全然思わない! 多分皆元もそうだろうが、今は仕方ない! さあ乗ってくれ!」

「う、うん! 安納病院よ!」

皆元がリアキャリアに座り、俺にがしつと掴まる。

「自転車だけは自信あるんだ。急ぐぞ！」
そう。何も出来ない俺だけど、自転車だけは自信があった。安全運転、そして信号を守った上で、きっちりとルールを守った上で、誰よりも速く走れる。そしてそれはあくまで趣味の延長線で、気がついたら速く走っていただけのこと。
ただの自負に過ぎないけど、今はそれが嬉しい。皆元のために走っているんだから。
俺は後ろに皆元を乗せたまま、放課後の町を走り抜けた。

「着いたぞ！」

「うん！」

皆元が自転車から降りる。だが、歩いていこうとはしない。

「どうしたんだ、早く行かないと」

「お願い……一緒に来て……」

ちょっと気が強めなはずの彼女の、意外すぎる頼み。彼女がここまで気弱になるとは、皆元のおじいちゃんは一体どんな電話をしたのだろう。そう思いながらも、俺は答えた。

「わかった。行こう！」

エレベーターを待つのもじれったくて、二人で階段を駆け上がったいく。皆元の案内で病室に辿り着くと、そこには確かに彼女の祖父がいた。空中を浮遊する少佐と共に。

「おじいちゃん！」

皆元が涙ながらに祖父に駆け寄る。これは演技であるはずなのだが、少佐の顔が青ざめていた。

「本当に発作が起こったらしい！ 急いで看護婦を呼べ！」

そう言っていた。答える間もなく、ナースコールのボタンを押した。

廊下に並べられた椅子。皆元の隣に座っているはずなのに、嬉し

さはない。

当の皆元はというと、俯くばかり。目には涙が溢れている。

『大丈夫だよ』

そんな無責任な一言は言えなくて、言葉が詰まる。

俺の隣に浮遊している少佐も、なんとも苦しそうな顔をしている。

ひたすらに押し黙り、三人で待つ廊下。医者の方は、意外に早くかけられた。

「もう大丈夫です。発見が早くて助かりました」

聞いた話だと発作自体はとても珍しく、それが悪化することも滅多にないのだとか。

故に専門家の目から見れば落ち着いて対処できるが、それを知らない三人には肝が冷える出来事だった。特に、孫である皆元には。

「平内君といったな。由妃をここまで送ってくれたそうだね。ありがとう」

「あ、いえ、俺は偶然通りかかっただけで」

と言っていいのか迷ったが、少佐が首を縦に振ったのでそれで通すことにした。

「それでも連れてきてくれたのは事実だろう。ほら、由妃もお礼を言いなさい」

「あ、その……ありがとう」

ぺこりと頭を下げる皆元は、まだいつもの彼女ではない。なんとか彼女の元気を出してあげたい。俺はそう思った。

「驚いたな」

「？」

だから、怒られるのを覚悟でこう言うことにした。

「まさか皆元がこんな簡単にお礼を言うなんて。もっとお高くとまつた人かと思ってたよ」

「な、ななんなんですって!? あんた、人をどんな風に」

「そう、それだ」

「!?!?」

俺のほうに、自然と笑みがこぼれた。いつもの元気な皆元が帰ってきたから。

「さっきのは嘘だ。ちょっとでも元気になればと思って、思ってもいないことを言っ、かるく挑発してみたんだ。ごめん」

「だからってあんた、ロクに会話したこともない相手にいきなりそんな」

「もういいだろう、由妃。平内君はお前を察じて元気付けてくれたんだ。それはお前もわかっているんだろう？」

意外なところに祖父のフォローが入る。皆元はしぶしぶ椅子に座り、軽くこちらを睨みつけた。彼女の祖父も、その様子を目にして笑っていた。

「さて。ありがとうな、二人とも。身体も落ち着いたようだし、今日は帰ってくれても構わないぞ。由妃はもちろんだが、平内君もたまには遊びに来なさい。君さえよければ、私と友達になろうではないか」

「は、はい。よろしく……お願いします」

無言で驚いていたのは俺もだが、皆元もだった。彼女はまだ残ると言っていたが、俊雄さん、つまり彼女のおじいちゃんにだめられる形で病室を出た。

「ありがとう」

「え」

自転車を押して進む帰り道。皆元のお礼の言葉だった。

「だから、乗せていってくれてありがとう。あの時は本当に焦ってたから、乗せてくれたのは助かったわ」

「あ、ああ。うん。二人乗りは嫌いだ、あの状況なら仕方ねえな……って思ってた」

またしばらく続く無言の時間。皆元と歩いているのに、息苦しくて仕方ない。

その静寂を切り裂いたのは、驚くことに皆元のほう。

「私って小さい頃からおじいちゃんっ子だったから、今日は本当に

助かったの」

「そ、そうか。よかったな」

「助けてもらったんだし、何か一つぐらいお礼しないと気が済まないわ」

チャンス到来。そう思った。

だが、とかく誤解しがちなのが男という生物。見誤ってはいけない。実際、皆元も他意はなく言っている。ならば堅実にいこう。少しずつ近付いていって、攻めるのはそれからしよう。そう思って、俺は答えた。

「なら……勉強を教えてほしいんだ」

そしてそこで、墓穴を掘ったことに気付くのだ。

「へえ。何の科目？ どの辺りがわからないの？」

「そ、それは……」

そう。何々がわからないと言えるなら、救いようはたっぷりある。だが勉強をさぼりがちの者にとっては『わからないところがわからない』という残念な答えが一番多いのだ。

もちろん、そこはさすが皆元。

「もしかして、どこがわからないかすらわからないとか言うんじゃない？」

「……」

「……ゴメン」

すぐに看破されてしまうのだった。

「まったく…… だったらまずはおかしいところを探してきなさい。教科書が最高の参考書なんだから、教科書に沿っていけば全部わかるはずよ」

流石の天才発言と感心しつつも、浮かび上がる一つの疑問。

「ってことは、教科書一冊あれば他に何もいらなくていいことか？」

「そうよ。私も今まで参考書なんて買ったことないもの。受験勉強ならいざ知らず、学校の勉強はいつも教科書よ」

「ってことは、教えてもらう必要もないってことか？」

「そういうことね」

「それじゃお礼も何も無いじゃねえかつ!!」

「バカね。あんた、受験勉強しないつもりなの？ 応用問題は流石に参考書が要るわよ」

「それにしたって参考書で済むじゃねえかつ!!」

「それでもわからない時は助けてあげる」

「なんか、えらく限定されてるな……」

おちよくっているのだろうか。皆元は楽しそうに笑っていた。思わずドキッとしてしまった自分を心中で叱りながら、俺は皆元をおちよくり返すように言った。

「だけど皆元も、今日初めて喋る相手にその口ぶりはどうかと思うなあ。呼称なんていきなり『あんた』だしさ」

「さつき『挑発した』って言うてたのはどこの誰よ。乗った私も私だけど、見せた以上は隠すのも不自然でしょ。あんたの言う通り、これがいつもの私よ」

「その口の悪さはやめたほうがいいな」

「心配されなくても、変なことを言われなければおしとやかにやってるわ」

「猫かぶってやがる……」

こうして、ぎゃあぎゃあ騒ぎながらも、俺達はそれぞれの家路に着くのだった。

なんだかんだで上手くいった放課後。今はただ、少佐に感謝しなければならぬ。

「上手くいった、ということになるのかな」

皆元がフツと笑う。俺もまた、釣られるように笑った。

「そうだろうな。きっかけには十分すぎるぐらいだ」

俺と皆元が目を合わせる。俺達は二人とも、昔を思い出していた。

「……由妃は、私の孫は、妻の若い頃にそっくりだろう」

「ああ。あの容姿といい、気の強さといい、そっくりだ。帝に聞い

た話では、お前の妻と同様に頭も良いらしいな。学年で一番だとか言っていたぞ」

「そして、平内帝君は……」

俺も皆元も、同じことを考えていた。

「ああ。お前の若い頃、それも全く駄目だった頃にそっくりだ」

「……時間は巡るのかねえ」

「巡るんだろうな。だが、奴らは俺達より余程楽しい人生を送るだろう」

「そうあってほしいものだ。願わくば、私と妻との繰り返しではなく、もっと素晴らしき恋愛を。もっと素晴らしき青春の日々を」

杯を掲げるように、手を上に伸ばす皆元。俺もそれに応えながらも、一つだけ指摘した。

「………一応言っておくが、あの二人は現在恋愛関係にないぞ。

それどころか知り合っただけだ」

「なるさ、きつと」

「フン。孫の色恋を勝手に決めるとは、鬱陶しい爺だ」

「そう言うな」

数十年ぶりの邂逅。俺達はあの時以来の、満面の笑みを浮かべた。

(後書き)

みなもと 源 由妃 妃
ひらうち たいら みかど みかど
平内 平 帝 帝

これが今回の言葉遊びです。こんにちは。

ある日軍用水筒を目にして、このストーリーを思い立ちました。短編は初めてです。

どんなのが短編かすらわからないまま書いたので、感想や評価などいただけずととても嬉しいです。

今回は短編ですが、皆様の応援次第では連載版も考えるかもしれません。少佐がぎゃあぎゃあ騒いだり、かと思えば由妃も帝にぎゃあぎゃあ騒いだり……！

中学三年生にしたのは、そこら辺の布石を一応考えているからです。あとはその、丁度当時の特攻隊ぐらいの年齢だから……もしメイン作品より人気出たらそれはそれでシヨックだけど。

ちなみに作品内の世界は日本ではないということにしたいけど無理があります。帝國は帝國です。

ここらへんもあって、キャラクターの髪の色も決めていない状態です。ゴメンナサイ。

では、ありがとうございました。連載中のも勿論書きますヨ！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6523j/>

きっかけ水筒

2011年1月3日23時33分発行